

第二章 靈 意 識









物の智恵は事象を知り。入り。致は真理を了  
 解する力を持つ。林橋は木から落ち、雨は大  
 地に降る。——かゝる事象を記憶に負はし、續け  
 ることは出来る、そして涯てしかたない。然し  
 一爰に童力の法則を把握すれば、はてしなく  
 事象を蒐集する要をなし、満まし得る。無数  
 の事象を支配する一々の真理に到達し、左の如  
 〇真理のこの発見は、人百にと一と純な歡喜  
 である。——人百を記憶の童者から解放する  
 のびある。單なる事象は袋小路の如きもので  
 、唯それだけであり、彼方の世界を持つてない  
 〇然し、真理は全水平線に視界に拓け、我々  
 無限の境地に等しく。グライセン。如く人が生  
 物学に就いて或る單純な一般的真理を發見し  
 た時、その真理が生物学に止らねばして、檢も  
 対象物のために灯すればランゴの光りも  
 対象物の邊か彼方に迄放つ如く、その初めの  
 目的を越えて、人百を生活と思想との全域を照  
 らすのはこれに在り。かくて、我々は  
 真理は凡ゆる事象を團んでみることが、單なる

(43)



事文の総計で付なく、四方八方から事文を踏  
 み越えて、万物を包含せる無限の文在目指  
 すと云ふことを知るののである。

科学の領域に於ると同様に意識の領域に於  
 て、人言は出来るだけ広領域を見晴らし得  
 る物を何事か中心思想を判然と了解しなけれ  
 ば存らなへ。もしこのことは、優波尼沙土  
 如く世自身の靈を知らし、即ち言葉を換へて  
 云へば、各自の靈の中に在る渾一と云ふ一大  
 原理を了解せよと云ふ時に眼中に置いておる

目的存ののである。

我々の利己的衝動や利己的欲望の全ては、  
 自己の靈の眞の道覚を曇らせる。これ、其写  
 は必と融合しな狭い自我の微候に過ぎぬか  
 らである。我々が、自己の靈を意識する時、  
 我々は己が我を超越し、且一徳と融合せぬ狭い  
 自我より万物と一層深い親縁関係にある内  
 部の存在、即ち眞の自我を窺見する。

子供軍がアルファベットの個々別々の文字を  
 習ひ始める時、それ以外の感なき。



至小は、深業の眞の目的を見落してゐるから  
 である。實際、文字が我々の注意を唯、文字自  
 身に、従つて孤立物として見ることに要求す  
 る百何、文字は我々を渡り越せざるが、南の山  
 びある。又、文字が我々を渡り越せざるが、南の山  
 り、至して一つの思想を伝へて始め、文字は  
 我々に、これり、我々の源となる。同様に、我々の  
 限界内に、我々の靈が引込まれる。我々の靈は靈  
 る意義を失ふのである。所故から、靈の眞  
 の本質は渾一に在るからである。靈は唯、靈  
 自体を以て我々を包含せしめることによつてのみ靈  
 の眞理を見出し得る。至して唯、この時にのみ  
 靈は靈の歡喜を持つのである。自然界に於  
 ける一律の法則を發見する迄は、人は心を操り  
 ず、恐怖の状態を生ずる。自然界を敵  
 視し、左りである。人百が發見したこの法則は  
 、人百の靈なる理性と自然界の働きの間に  
 振が、つて、調和の知覚に違ふない。至小は  
 依つて、以て人百がその任める自然界と關係



付けられる孩念の絆である。人百がこれを見  
 出す時、自分自身に環境の裡に在ることを了  
 解するが故に、無上の歡喜を覺えるのである  
 。何事でも了解するに云ふことは、その中に  
 我々自身のものでもある。何物も我々に見出すこと  
 あり、それこそ、それは正に我々自身  
 本然見しと我々自身とである。この了解は云ふ  
 關係は部分的であるが、我々云ふ關係は完全  
 である。我々には、差別觀念は抹殺され、  
 人百の靈はそれの目的を完全の形で達して、そ  
 れ自身の限界を越え、無限界の國を跨ぐのじ  
 めである。それは我々には、我々人百が得ること  
 の出来最善の幸福である。これ、唯我を通じこの  
 人百は真に自分自身以上のものである  
 。且つ万物に一等なることを知るが故である  
 。  
 人百がその靈の裡に持つておる渾一を云ふ  
 こと、此理は、常に活動して、文學、芸術、科  
 学、社会、政治策、宗教を通じて、遠く、広く  
 關係を確立するのである。印度の偉大なる啓



示者には、人歎妻の爲に自我を棄却し、  
 妻の意味を明かすらしめる人々を云ふの  
 である。彼等は其の妻の奉仕に於て、  
 讓諍や迫害、  
 剥奪や死に直面する。彼等は我々の  
 生活に於て、  
 盡の生活を送り、かくて人歎の究極の  
 真理を我々に身を以て示して受小るの  
 である。  
 ○我々は彼等を「マハトマー」、  
 即ち偉大なる靈  
 の人々と呼ぶ。

靈が欲しければなりしと。この意味は、  
 我々が  
 加へる人妻を「ヤ」とし、その人の中  
 に最亨の  
 意味に於る我々の自身の靈を見るに  
 云ふことである。  
 我々の生存の究極の真理はこの  
 点に存する。パラマートマー、  
 即ち「最亨の靈」は  
 余の子に存するのみならず、  
 余にも存する。として余の子  
 に対する歡びは、この真理の明察  
 である。我々の妻人の哀歡は一つ  
 である。我々の哀歡は一つである。  
 上存りと云ふことは全く平凡な事  
 実である。



加るか、考へて見ると不思議である。所故か  
 。我々が表する者と合一して、その人の霊の  
 中に浸り込んたを、け、それだけ我々が偉くを  
 った為であり、全宇宙を包含する偉大な真理  
 に觸れたためである。

自命の子や、友人や、其他の表人に対する  
 我々の表は、我々が互に進んで自らの霊を明  
 察するにこそ阻止するにこそ履くである。この  
 表も、疑ひもなく、我々の意識の領域を拡張  
 するけれども、意識の最も自由な拡張を制限す

る。然し乍ら、この表は渾一を知りて一歩ど  
 あり、明察に附随する不思議の全てはこの一  
 歩その中のみに存する。この表は我々の  
 霊の美の性質を示して受ける。確かに、この  
 表は、利己的表を棄て、他と融合するにこそ  
 我々の最高級の歡喜が存するにこそ表へて受  
 ける。

我々が表の周囲に置之制限に比例して、表  
 は我々に新しい精神の力や洞察や美をよへて  
 受ける。然し、此等の制限が屈伸性を失ひ、



孩局、愛の精神と我子守らぬ、此子の心の王  
 子へてくハなくなる。その時、友情は排他的  
 となり、家族は利己的となり、客扱ひが悪く  
 なる。子家は偏狭となり、他の種族に対し侵  
 略的に敵対する様になる。丁度、目貼りした  
 囲碁の中に燃ゆる火を以てハるヤリを以て、  
 有毒瓦斯がたまつて火焰を消す迄は輝しく是  
 ろのどある。然し、この愛は七匹に先立ち  
 河一を知らず一歩なりとの真理を真知し、  
 且つ、盲目で、空虚で、冷い闇の把握から免  
 小る哉ハモ知らしめて愛小た。  
 優波尼沙土にま小ハ、宇宙意識、即ち神急  
 識の鍵は人間の靈意識に在る。自我から離れ  
 た我々の靈を知らぬことは、最言の解脱實現に  
 向ふ第一歩である。我々は本来靈存りと云ふ  
 ことと絶対的確實なことを知らねば存らな  
 ぬ。偶りの自我支配することにより、即ち自  
 我の傲慢、貪欲、心配に超越することにより  
 、又、物質的損失や肉体的死は我々の靈の真  
 理や我々の靈の偉大さから何物も取り去り得



来、盡なりと知ることをかき去るのどある。よよ  
 二は卵の自己中心的孤立から破り出る時に、  
 三は這自命を包んでおた固い殻は、未きは自  
 分の生命の一部では無いと云ふことを知る。  
 その殻は死物であり、成長せしめ、殻の外  
 へは彼方の世界に就いては何等の瞥見せしめ  
 へないのどある。どんなに氣持よく完全に用  
 くなつておやうとせよ、三は一撃を与へる水  
 おはきたらぬし、打破する、三はよつて芝と  
 空気の自由を得る水おはならぬ。三して鳥  
 の生命の完全な目的は遂げらるるのどある。  
 梵語で、鳥とは二度生るるのどと云はる。  
 了。三とせよ、十二年の期間、自制と高尚な  
 思想との訓練の儀式を経たりし人、即ち慾望  
 が単純になり、心が純潔になり、又、精神の  
 孤かなるを忘るるまで、以て人生の凡ゆる責任を  
 取りと覚悟して、難行苦行の生活から出て来た  
 人とは、生るる水左のどと云はる。その人は、  
 自我と云ふ盲目の包被物から出て、盡き生るる



自由へ再生したのだと考へられぬ。即ち  
、周囲との生じた因縁を保つたに在り  
、森羅万象と一になつたといふ事へは  
のびある。

印度の指導者達は、否定の空漠たる空クウに到  
るのみなる世界又自我の否定を説教したのだ  
と云ふ考への了達つてぬことと私に既に(52頁)讀  
者に發せられた。そして今一に發せせぬ事  
をい。彼等の目的とする所は靈の了解であつ  
た。即ち換言すれば、完全の眞理に浸つて世

界を得ることとであつた。キリストが「幸福サイハチを  
るかな、柔和なる者。その人は地を嗣がんとし  
と云ふ左の意味はこのこととであつた。キリスト  
は、人びとが自我の傲慢から逃れぬ時、即ち人  
びとが柔和になつた時には、本意に世界を共有す  
ると云ふ真理を公言したるのである。かくある  
と云ふと、人びとは世界に於て自今の位置に握  
捉として入つて行く要はない。位置は人びとの  
不滅の靈の権力によつて到る處に彼の左め  
確保されるのである。宇宙又宇宙神との結合



を定成するに、よつて實現す小ることに存

つて、みる重の本来の作用を、自我の傲慢は、材

げのひである。

佛陀ブツブツは、善人・レム人(48)に對する説教に於て

「レム人よ、まことに余は活動す小る。然サ」

り、ト云ふ、言葉や思想や行に於る要を將來する

活動のみを小難する。レム人よ、まことに余は

絶滅す説く。然サり、ト云ふ、傲慢、煩惱、悪意、

無明の絶滅す説く。で、寛恕、慈悲、真理の

絶滅は説かぬのを、レと云ふに、みる。

佛陀ブツブツの説く解脱の教へは、無明アヴィジヤの奴隸たる

こと、から、の釈放であつた。アヴィジヤとは、我

々の意識を暗くし、且つ、小私的自我的境

界内に閉シ込め、依るの、ある無智を云ふに、こ

ある。自我の頑固を令離せし、かくして、孤

利追求に附帶する傲慢、貪欲、残酷の源と存

る。は、このアヴィジヤ、この意識の制限である

。人は眠ると肉作的生命の狭い活動の裡に、閉シ

込めらる。その人、は生くる。し、四圍に對

する自己の生命の、按々を、自信を知らぬ。故



にその人言は自今自身を知らぬのひある。その  
 の故に、人言が無明の生活を送る時、人言は  
 自己自身の我<sup>が</sup>の裡に閉<sup>ぢ</sup>込められる。その霊は  
 の睡眠にある。その意識は己れを取囲むに  
 る最善の著作を十令には知らず。その故に  
 彼は自今自身の霊の著作を知らぬのひある。  
 彼が菩提<sup>ボトキ</sup>を<sup>(50)</sup>、即ち自我の眠りから醒めて意  
 識の完全を達する時<sup>ゾクダ</sup>佛陀、即ち覚者とす。  
 べにカル州の一村に於て、私は或宗派の二  
 人の禁欲主義者に産つた。一は或方の宗教  
 の従と異つておる特徴は、こゝに分つておます  
 かし、私は私に尋ねて見た。一人は暫し遠巡して  
 後、一は私に定義を下す。こゝは雄し、こゝは  
 す。一は答へた。今一人は「いや、まことに  
 一は西洋の宗教上の師匠の指導  
 を受け、我々は自今自身の霊を真先に知ら  
 ねばなりませぬ。そして我々がこれを知つた  
 時に、自今<sup>の</sup>裡に最善の霊なる者を見出し得  
 るの故に考へておます。一は答へた。一は  
 自ら証し、故に世界全人類にあなた方の教へ



正説かきいのかしと私は尋ねた。『湯を煮て  
 る人は誰でい自分から河へ来たでせう。』と  
 答へた。『然し、左指に作るには作る如  
 、實際左指でや。即ち彼等は来つゝあり  
 ませぬ。』とす。その人は静かに微笑し、  
 しこ此處や心配の気色は些もなく確信を以て  
 、『彼等は来るに違ひありませぬ。皆如昔。  
 』と云つた。

主義者の言は正し。夜會より大切なる要物  
 正満たす為に人言は實際、外に出て居る。人  
 言は自分自身を見出す為に外に出て居る。人  
 言の了史は、人言の不滅の自我、即ち盡すを  
 みて未知の世界へとの旅の了史をいふ。

帝玉の興と王冠、巨大富の山を築く上は、  
 水を無残に埃り、上に投ず棄てる。水を  
 経、人言の夢想と撞小に形を与へる。こゝに  
 の多くの群小を創造し、水を造るに帰して  
 幼年期の玩具の如くに捨て去る。こゝを経、  
 代り不思議な王冠と魔法の鍵を鍛へる。こゝを  
 経、



、この幾時代かの芳御を控へ、  
 形正造り上りたるために工場に  
 来るとすべしと小玉を控へ、  
 向つて人言は時代から時代へ  
 のびある。その盡日は、人言  
 大にあり、人言が成就せる功  
 加築く学説より小偉大なる盡  
 向の上の途は、死即ち令解に  
 ら小ぬ盡存のびある。人言の  
 決して軽んじるとよきもの即  
 ち小なる此のびは  
 ちい。その小は巨大なる廢墟  
 撒く。人言の苦しみは巨大な  
 陣痛の振に大にかつた。その  
 心無限である或る文壇の序曲  
 振々の方法で、殉難を経て来  
 った。ある。そして人言の作  
 心日々、笑に於て驚くべく、量  
 い生翬王持つて行く、いはば  
 壇である。若し、終始、人言  
 盡の最深の歡楽を感得するに  
 ば、全

(52)

(51)



此等の苦しみ、殉難、犠牲等は絶対は無意味  
 であり、我慢の去来ぬれのごあらじ。その最  
 深の歡喜は苦によつて盡の神々しい力を試し  
 て笑ふ。又その歡喜が自己放棄をせしめる  
 。その自己放棄によつて盡の無盡の富を証明  
 して笑ふのである。さうを、彼等巡礼は、  
 皆が皆、来つゝある。即ち世界の真の并有に  
 向つて来つゝある。彼等は幸にこの意識を振  
 げつゝある。この全このものを包含せし一中  
 心真理に益々近づきつゝある。

人は、人が真に自今、盡を意識するやうになる  
 迄は、人の食は底知れぬものごあり、人  
 生の慾望は終りがない。その時迄世界は人  
 にとつて絶えず流動の状態に、即ち絶えず変  
 転の状態に在る。変転するものは、あはれ  
 無子か如き幻の状態に在る。自今、盡を候つ  
 たり人よとつては、宇宙の明確な中心がある。  
 その中心の周囲に、凡この他のものがある。遍  
 在な位置を見出し得るし、又その中心からの  
 み調和せる生活の幸福を引出す、且つ樂し



み得るのどある。

その分子が熱の膨脹力によつて遠く離れて

散らばつて行く雲霧の状態に違ふから、

代、未だその形の明確さに到達しないので、又

、莫しに目的もなく、左に熱と運動とが

あるに違ふから、代が、嘗て地球には

あつた。中心の支配下に凡このさ迷へる物質

主齋ら、人と努めを力に、よつて地球の水蒸気

が凝縮して、旋一、円、円、よつて地球の一定作と

きつた時に、地球は序々に、知くヤモンドの首

飾りの緑玉の垂下装飾物、それに、太陽系の遊

星の首に、適当な位置を占め、るのである。

我々の重に、つて、さうである。七首目的衝

動と慾望の熱と運動とが、四方の方から我々

の霊の注意を、外らす時には、事ごとく我々は

何事もない、王手へる、こゝれ、出来ぬ、

る、二とも、出来、ない。我、自製の力により、

即ち凡この教子要素を、調和し、ま、ち、に、離

れ、こゝれ、其、導の要素を、統一する、力によつて、

我々の霊の中に、己が中心を見出す時、その時



には我々の孤立せる印象も纏められ、  
 智慧に存する。そして我々の心の瞬時的衝動は  
 意に於て完成する。その時には、我々の生活  
 の凡々の些細なる細目は無限の目的を現はす  
 のである。そして凡々の我々の思想と行動と  
 は内的に調和して離れ離れに接合する。  
 優波尼沙士は強調して曰く、「世一王、即ち  
 聖王知れ。」「<sup>(53)</sup>」  
 彼は不滅の存在に到る橋をりしと  
 。  
 此が人間の究極の目的である。即ち人間  
 の裡に在る一なるものの王を見出す。云ふこと  
 。その一なるものは人間の真理であり、聖  
 あり、靈的生活即ち天正に入る門を南く鍵  
 あり。人間の慾望は多し。そして慾望は世界  
 のあらゆる事物を狂的に追求してゐる。亦故に  
 ならぬ、慾望はこの物質の裡に生命を持ち、  
 満足と覚ゆるからである。然し、人間の裡に  
 宿する一なるものは、常に渾一を求め、  
 する。即ち知識に於る渾一、意に於る渾一、意  
 志の目的に於る渾一を求め、  
 する。







我々と一致せしめることにより、我々の  
 眼は自然的に物を全作として見るのである。  
 霊が最善の一なるものの中に合一して浸小る  
 まで、自然のままに、しかも全作として了解す  
 る我々の霊意識の直感の場合にとってもさう  
 である。

「宇宙の活動の裡に現はれるこの神は、人  
 々の心の中に最善の霊として常に宿つてゐる  
 。その心の中の即刻的直感を通じてこの神を了解  
 する人々には不滅を達する」と優波尼沙土は云

ふ。  
 この神はライニユヴァカルマ毗首羯磨(57)である。即ちこの神の自

然界に現はれる外的示現は自然界の多種多様  
 の形や力の中に在るものである。然し、我々の  
 霊の裡に在るこの神の内的示現は唯一の狀態  
 で存してゐるものである。我々が自然界に在  
 る真理を追求するには、それ故、分析と科学  
 の漸進的方法とを用ゐる。然し我々の霊の裡  
 なる真理を我々が了解するのは即刻的であり  
 、しかも直接の直感に依つていである。我々は



大しづ、獲得した知識を継続的に追加するこ  
 とはよつては永劫全解を極るとも最高の霊を  
 得るニとは出来まい。依故かから、最高の霊  
 は一であり、しかも罪分から出来て居るもの  
 ではありからである。我々は唯々、最高の霊を  
 我々の心の源泉たる心、我々の霊の源泉たる  
 霊と知り得るのみである。我々は唯々、最高の  
 霊を我々が己が我を捨て、それと面接して立  
 つ時に感じれる者と歎我との間に感じれるのみで  
 ある。

嘗て人々の心から生じた最深の且つ最も真  
 剣な祈りは、古語に「おれ自己を啓示するも  
 のよ、私に汝を現はせ。」<sup>(58)</sup>と云はれて来たも  
 のである。我々がみじめな所以は、我々が自  
 我——讓ふせがする利己的の自我、妻の光を  
 けこもる小自身暗黒の反射しなひ自我、神が  
 見えなひ自我の奴隷であるからである。我々  
 の自我は自らか不調和な、ごうごうたる要求  
 である。——それには神の妻である音楽の伴小  
 こ、その結核表へる調子の取れな聖琴ではな



い。不満から来る吐息、失敗から来る疲勞、  
 過去に對する甲斐なき後悔、未來に對する不  
 安から我々の浅い心さまげまじり。それらは我  
 々が自身の重き見付けなかつたからであり、  
 自己を啓すする重き我々の裡に示す水なかつ  
 たからであり。我々の神への訴へは「お、  
 池、我々をして畏敬せしむるものよ、池の恵  
 みの微笑みび永久に救つて呉れよ」は此處に  
 由来する。この自己満足、この飽くことま知  
 らぬ貪慾、この所有の誇り、この心の傲慢存  
 する阻害は、息を止まらせる如く屍体の屍衣ど  
 ろる。『<sup>ルードラ</sup>魯達羅神よ。お、汝畏敬せしむる  
 ものよ、この暗い覆ひを二一に引裂け、それ  
 こそ池の恵みの微笑みの救済の光をよ、この  
 暗黒の夜を貫かしめ、私の重き目覚めしめよ  
 。』  
 「冥在せざるものより冥在へ私を導き給へ  
 。自我の闇から重き光明へ、自我の死から重  
 の不滅へ私を導き給へ。』<sup>(67)</sup>然し、この一つ  
 祈りまじり云ふ風にして聴届けられんことを



無限なるものに敵対するからである。かく  
 の如きは、人間の我々による人間の善の破壊で  
 ある。それは、人間が一部を得るか左めは人  
 々の全部を賭ける、危険にも言に由々しい負  
 け勝負である。罪は真理を暗くするものであ  
 り、我々の意識、純潔を汚すものである。罪  
 に於て、我々は快樂を眞に望ましいものとい  
 子たぬびなく、我々の執望の毒い芝を望ま  
 しいものを見せろが故に快樂を欲求し、事物  
 の本末偉大なるが爲でなく、我々の貪慾が

離れ無限であるからなり。然しこの測るべから  
 なる隙は、自己を不現するものか人間の善  
 の中に自己を不現するや一瞬にして架橋す  
 る。有限なるものと無限なるものとが相会す  
 る地点がそこに在る故に、奇蹟が交々として  
 其處に生ずるのである。父なる神よ、私の  
 罪の全てを完全に被ひ清め給へ。罪に於て  
 人は、自己の裡なる有限なるものに味方し







状態に在る。

人は平和と調和との状態に在り、善と美との  
 状態に在る。人々の要求は、自ら正定全無缺に表現し得  
 ることである。自己表現へのこの欲ひは人々の  
 正しき言や力を求めしめる。知し、人々は、  
 蓄積は自己表現に非ざることを発見せねばなら  
 ない。人々の正定現するものは外物ではなく、  
 、心眼である。この心眼が南か小る時には、  
 一瞬時にして、人々の最善の正定は自己の裡  
 なる神自身の表現であることとを知り。而して

存、義に飢渴者。その人は飽くことを得  
 ん。と云はれ、は此處に由来する。何故か  
 なるは、正義は霊の神聖な食物であり、正義  
 以外の何物も人々を満たす、無限者の生活を送  
 らしめず、永久なるものへの人の成長を助け  
 ず、こののである。我々は我々の又、  
 の享樂が生まれる此に挨拶する。我々は又、  
 我々の霊の徳が生まれる此に挨拶する。我々  
 は善であり、最善の徳である此に挨拶する。  
 此の中にて我々は万物と結合する、即ち我



人々の要求は、自己の裡なる神の表現たる自  
 己の霊の表現に對してなす。人々は自分  
 の霊が、その本質は表現であるアーライフなる  
 無限者の裡に在ることと了解する時に完全な  
 人となり、最も自分を表現を達する。

人々の真の不幸は、自分自身に慾望の眞只  
 中に隠れこもり、完全には出て来ないこと、  
 自分を見之なくしてゐることである。人々は  
 自分一個の環境の彼方に在る自分を感得し  
 とは出来ない。人々の偉大なる自我、即ち眞

我は抹殺すべし、人々の眞姿は了解すべし。  
 人々の全本欲から発してゐる祈りは、それ故  
 に「表現の霊なる此よ、私の裡に此を表現せ  
 よ」とある。人々の自我の完全な表現に對す  
 る渴望は、肉作の糧に對する飢や渴よりも、  
 富や栄養に對する熱望よりも一層深く人々に  
 固有のものである。この祈りは學に、學に  
 人々から生れ出たものではない。それは「アーライフ」  
 の奥底に在る。それは人々の裡に於る表現  
 神の止むなす督促、即ち永之の表現の霊の止



をなき督促である。金この創造の原動力であ  
 る、有限なるものの中の無限なるもの、不現  
 は星の燦らめく天、花の美の中では、完全な  
 状態で見られる。それは、人々の霊の中に  
 見られる。何故か知らぬ、意思は意思の中に  
 その表現を求め、自由は自己放棄の自由の中  
 にその最善の目的を獲る採に向って行くから  
 である。

それは故に、宇宙の偉大なる王が神威を以て  
 保護しなかつたため、人々の自我である。――

彼はそれこそ自由にして置いたのである。人々  
 が自然と肉体する肉体的、精神的組織に於て  
 は、人々はその王の支配を承認せねばならな  
 い。然し、人々の自我に於ては、人々は王の  
 支配を否認する。これは自由である。我々の自  
 己に於ては、神は又陽権を勝ち得ねばならな  
 い。神は王として、人々の客として来る。それ  
 故に神は招かざる迄待たねばならぬ。人々  
 の自我から神は、その要求を引下したるのである  
 。何故か知らぬ、神は我々の要求を求め、其處



へやつて来るのびあるからを。神の武装せる  
 力、即ち自然界の法則は自我の門外に立つて  
 ぬる。そして唯、神の意の支配者たる美のみ  
 が自我の聖域に入場を許すのみ。  
 無政府状態が許すのみは意志のこの領域  
 に於てのみである。虚偽と不真との不調和な  
 音楽が勢を逞しくするのには、人間の自我に於  
 てのみである。かくの如く純然たる放恣は  
 神のみせば決して優勢たり之がゆるべしと若  
 痛の全り叫ぶ破目に迄事態は来り得る。まこ  
 とに、神は我々の自我から離れて外に立つて  
 ぬる。そこには、神の注意深き忍耐は涯とし  
 せ知らぬし、又、戸が神に封して閉じ、これ  
 ぬるをいふ、強ひて開けや」とはしなむ。何  
 故か知らぬ、この我々の心のなる自我は、神  
 の力の強制によつていなく、意によつて蓋で  
 ある我々の自我の最高意の意義に達せぬを  
 ぬじ、かくして神と自由に結合せぬを知ら  
 ぬからである。

霊が神と一になつて人々は人々の最高意の花と



して人々の前に現はれる。さう云ふ人々に於て  
 人々は、實際に人々の愛の姿を見出すのであ  
 る。何故かをいふ、さう云ふ人々にその左  
 めの神の最も完全な表現としてこの表現神アーダイフが人  
 々の霊の中び示現されるし、最善の意思と我  
 々の意思、我々の愛と永続する愛との完全な  
 見らみらである。  
 三、此故、即ちには神を真に愛する人々  
 は、西洋に於ては殆ど神聖を冒すものと思は  
 れる程の尊敬を人々から受けける。我々はそれの  
 人々に神の教習が表現されるを見る、神の示  
 現に於ける障壁中の最もなるものか取除かれ  
 る。正見、神自身の世上の歡心人々に十令に  
 現はれる。その見る。その人々を再びて  
 神々しき質樸を蔽はれる人々の全世界を見  
 る。神の愛を越えておる人々の生命は我々の  
 地上の愛の全てを燦然たるものならしめる。  
 我々の生活の密接な交りの全て、我々の生活  
 の快苦の経験の全ては神々しき愛のこの表示  
 の周りに集り、我々かその人々に目撃する劇



正形作る。無限の神祕の接觸は下らぬのや  
 見慣れたものを通り過つて、言懐に盡し難  
 音楽を奏びしめる。木や星や青い丘は我々に  
 ひとつ言葉で云ひ表はせぬ意味が満ち溢るこ  
 ろの神々しい物のシンボルの手に思はれる。  
 人間の畫は自我を云子重以幕を引け除ける時  
 に、即ち人間の畫の面纱ヴェールが掲げられ人間の  
 畫がその永久の美人、即ち神と面と向ふ合つ  
 て立つ時に、我々は新世界を創造中の神を見  
 る手に思はれる。

然しこの境地は何処。それは、丁度、その  
 生命や美に探々の変化があり、しかる一にし  
 て全そのの春の朝の如くである。人間の  
 生活が迷ひから救はれて、畫の中にその統一  
 を見出すと神意識は、丁度、明りの焰に封す  
 る肉體の如く、直ちにこの統一に直接し、且  
 つてこれに自然なものと存する。生活の軌や生活  
 の矛盾の全ては調和される。智慧、善、行爲  
 は調和される。快苦は美と云ふ点で一になる  
 。慰みと自己放棄とは善に於て対等となる。



有限と無限との百隙は妻で満ち、妻で溢  
 小と来る。一々、瞬目か永遠なるもの神託  
 正齋らし、定形なすものか我々にして花の  
 形正なし、実の形正なしと現はれる。はてし  
 なすものか父として我々をその腕に抱き上げ  
 、友として我々を並んで歩く。その性質上、  
 全この制限に打勝ち、最言の一なるものとの  
 血縁関係を見出し得るのは重、即ち人間の裡  
 なる一なるもののみである。我々を未知の内  
 の調和や存在の全作性を得ぬ限りは、我々の  
 生活は習慣の生活の儘である。世界はなほも  
 機械と見ゆる。必要を場合には人百により統  
 御され、危害の有る處では警戒されるべく、世  
 界の物質的性質に於ても、又、その霊的生活  
 や美に於ても、両方面一存に我々と十分存同  
 胞関係に在るとは決して知ら小きハ機械と見  
 ゆるやびある。